

旭川文学資料友の会

# 友の会通信 第15号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会

〒0700044

旭川市常盤公園旭川市常盤館内

TEL 01662213310

FAX 01662213334

## 平成27年度 特定非営利活動法人「旭川文学資料友の会」 定期総会を開催

### 平成27年度定期総会を終えて

旭川文学資料友の会 会長

菅野 浩

特定非営利活動法人旭川文学資料友の会平成27年度定期総会を、平成27年5月17日、旭川文学資料館で開催しました。当日までの会員総数は202名、出席者と委任状提出者の合計は130名で、総会の成立が確認され、議長に山田勝子さん、議事録署名人に佐藤比左良氏、森内傳氏を選出し議事に入りました。

最初に平成26年度事業報告が行われました。自主企画展「詩と絵く詩人東延江展」では詩作品の掲載詩誌の多様さや野の花を主体とした絵の世界が好評を得、旭川文学資料展「豪放なるロマンチストく旭川ゆかりの詩人鈴木政輝展」では、小熊秀雄や今野大力などと交遊した「田筒帽」時代、川端康

成や萩原朔太郎、堀辰雄等とも交流を結んだ東京時代、実業を継ぐために呼び戻された旭川での活動、華道、茶道の指導者としての鈴木政輝など、その作品と生涯を展示紹介し、平成26年6月28日には東京から鈴木政輝の長女石田富美子さんが来旭され「父、鈴木政輝のこと」を講演され、友の会会員有志による鈴木政輝作品の朗読を行いました。

平成26年から指定管理者となった井上靖記念館では「井上靖・人と文学5『闘牛』『狐銃』の世界」「井上靖と西域紀行」展、文学資料館との共催で「井上靖初出掲載誌」展も開催し注目され、関連普及事業として、井上靖講座、朗読会、ミニコンサート、読書会や、茶会、文学散歩、青少年エッセイコンクールの実施など多くの事業を行った報告がありました。

決算報告、監査報告についても異議なく承認され、平成27年度事業計画、平成27年度予算についても承認されました。(詳細については先に送付しました総会資料を参照ください)

理事の改選期にあたり、理事として相川正志、石山宗晏、菅野浩、佐藤比左良、十河宣洋、富田正一、荒川美智、東延江、水下寿代、白井恵理子、片山晴夫、平間順一、森内傳の各氏、監事は氏家正実、阿部清の各氏が選任されました。

### 平成27年度「旭川文学資料友の会」

執行体制決定

平成27年度第一回理事会が5月27日開催され、規約に従い互選により次のとおり新役員体制が決定した。

#### 【顧問】

相川正志、井内治弥、北見弟花、木原直彦、黒田一秀、坂本タカ、菅沼和歌子、中山田融、深谷雄大、松田一夫、東郷明子

#### 【会長】

菅野浩

#### 【副会長】

石山宗晏、佐藤比左良、十河宣洋

#### 【旭川文学資料館長】

富田正一

#### 【旭川文学資料館副館長】

東延江

#### 【井上靖記念館長】

荒川美智

#### 【会計担当理事】

水下寿代

#### 【広報担当理事】

白井恵理子

#### 【理事】

相川正志、片山晴夫、平間順一、森内傳

#### 【監事】

氏家正実、阿部清

「冬まつり&オリンピックピック展」  
 (平成 26 年 12 月 2 日〜平成 27 年 2 月 14 日)  
 終了しました。

「冬まつり&オリンピックピック展」を終えて

百井昌男

私が市の職員として採用された、昭和 35 年に第一回目の冬まつりが開催され今年で 56 回を迎えた。冬まつりと一緒に社会人としての生活が始まった、この 56 年間にはいろいろな思い出はつきない。

昭和 40 年代の始めには庁舎前にも雪像が製作された。像の高さは 4 階であったと記憶している。仕事を終えた五時から同僚と夜遅くまで寒さ厳しいなか雪像作りに励んだのを思い出します。

昭和 39 年の東京オリンピックでは日本で最初の記念硬貨が発行され市内の金融機関はどこも長蛇の列で両替しました。当時郵便局は隣にあり局を一周以上の人が並んでいました。

旭川で冬のオリンピックを―として活動を始めて、1998 年の開催を目指し市民運動として市民を巻き込んでの一大運動でしたが幻に終わり、この活動の関連資料として誘致用の書籍・パンフレット・うちわ・牛乳パック・ビール缶等には宣伝広告を入れたもの等が沢山ありました。当時市民一丸となつての盛り上がりを知る人たちが新聞記事



に当時を思い出す等沢山の人に見ていただきました。

この展示にあたっては千点位の展示をしました。収集した資料が役に立ち懐かしく楽しんでいただけましたことは私にとって嬉しく楽しい思い出になります。

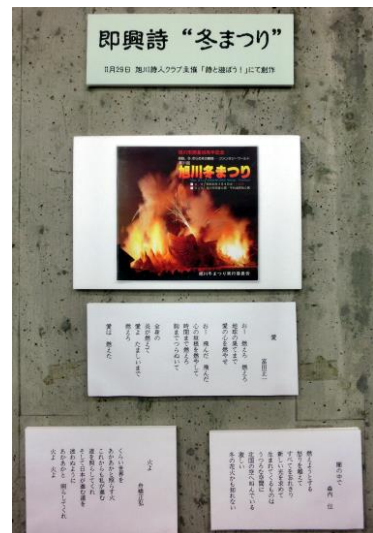
・冬まつりを題材にした即興詩として旭川詩人クラブメンバーの作品も展示しました。  
 ・札幌オリンピックの資料としては当時運営に係わった佐藤比左良さんのプログラムや入場チケット・メダル等も展示しました。



旭川冬まつり  
 バッジ



旭川オリンピック誘致の  
 ポスター



即興詩「冬まつり」

# 「井上靖 初出掲載誌展」終了

(平成 27 年 3 月 3 日〜 6 月 13 日)

## 井上靖「初出掲載誌展」で思ったこと

佐藤 比左良

水曜日ボランティアの日に少し早めに行き展示室を覗く。今度の「井上靖初出掲載誌展」は三度。いつの時も、見事にレイアウトされた展示には感心させられる。

ボランティアといっても、ぼくの場合、体力の限界からカード書きか、グラシン紙をかけるくらいのご隠居さんのような事しか出来ず、展示作業に立ち会ったことは一度もないが、短期間に前回のものを片付け、展示をするのは大変なことだと思

う。今回の「初出誌展」も作家活動のながい文豪のものとなれば当然、膨大な量になるはずだが、金にあかして集められた資料ではないので、ほどほどであろうと思っていた。ところが案に相違して驚いた。いつの間集められたのか集まったのか、壁一面、ガラスケース、初出誌の海である。展示担当ギリギリの知恵と努力に圧倒された。しかし、正直に言うと眼がまわった。

一冊一冊ゆっくり見たい、古い活字も追いたいと思っているのに眼移りする。

ぼくの場合、時間が限られていたせいもある。では、一般の方達はどうか。感想ノートには

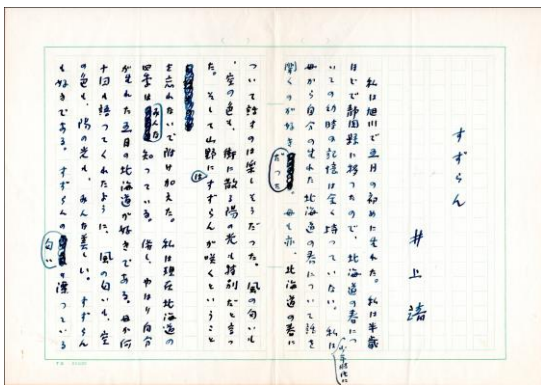
何も書かれていないのでうかがい知ることには出来ないが、これではつくづく勿体ないと思う。これは展示した人達の責任では勿論ない。企画展示室のコーナーが絶対に狭いのだ。あれだけの資料を並べるには二倍以上のスペースが必要だったろう。そして既に、第二展示室も手狭になっている。足元を見れば、資料室もパンク寸前。まさか今はやりの「断捨離」で始末することなどないだろうが、放っておけない事態が起こりつつある。



初出誌の数々



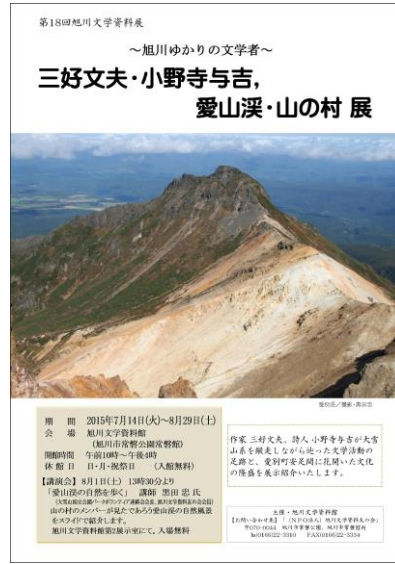
井上靖と、靖が生まれた頃 (明治 40 年) の旭川



井上靖 直筆原稿

旭川ゆかりの文学者を取り上げ展示紹介する第 18 回目の旭川文学資料展。今回は作家三好丈夫(昭 4・11・23〜昭 53・7・3)と詩人小野寺与吉(昭 5・1・21〜平 23・12・4)、そして二人が関わった上川町愛山溪の大雪山「山の村」にスポットをあてる。

旭川発行の文芸誌「冬澍」「愚神群」などに、主にアイヌ民族の在りようを追求する作品を発表し続け、昭和 40 年「重い神々の下僕」で第 53 回直木賞の有力候補にもなった三好丈夫。大雪山系を愛するグループ「山の村」の村長をつとめたが、48 歳の若さで「山の村」で急逝した。



**第18回 旭川文学資料展**  
「旭川ゆかりの文学者」  
**三好丈夫・小野寺与吉、  
愛山溪・山の村展**

平成 27 年 7 月 14 日(火)〜8月 29 日(土)  
開催中です！是非、ご観覧ください。

旭川師範在学中から詩作をはじめ、詩誌「A T O M」(安足間発行)「フロンティア」(旭川発行)の創刊にかかわり道内の若い詩人達に刺激を与えた小野寺与吉。彼もまた「山の村」のメンバーで大雪山系に詩魂をかき立てられたひとりである。混声合唱組曲「北の大地」(團伊玖磨作曲)や合唱曲「ふるさと」は遠い北国(飯田三郎作曲)の作詞者でもある。

会場では、二人の著書、作品掲載誌はもとより、写真、原稿、関連の新聞記事、また、「山の村」の公報や旗、バッジなども見ることが出来る。

今回はまた、二人と関係の深い安足間の文化活動をも展示紹介する。安足間(アンタロマ。現在は愛別町愛山)は戦前から万葉寺住職白川了照を中心に独特な文化圏を形成してきた。戦後は百田宗治ら中央文人の度々の来訪、菊池モト、一雄(筆名 真崎晋吾) 親子の活動をかかわりに、若き三好丈夫、小野寺与吉ら旭川の文学者が加わって附近的山稜や湿原からインスピレーションを受け、作品に結実させた。代用教員時代の五十嵐広三も安足間の住人となったことがあり、小野寺与吉を教えている。

大雪山の風景や資料などもあわせて展示。

開催期間中の 8 月 1 日(土)には、大雪山国立公園パークボランティア連絡会会長の黒田忠さんが愛山溪周辺の自然をスライドで紹介、江口建二さん製作の「三好丈夫最期の三日」も上映する予定。

(この映像は開催期間中、会場で自由に視聴できます)

是非、ご観覧、ご参加ください。



「山の村」の面々 昭和 41 年 愛山溪倶楽部にて



小野寺与吉  
平成 8 年  
百田宗治祭参加の  
車中にて



三好丈夫  
昭和 41 年  
愛山溪倶楽部にて

# リレーエッセイ

## 第 18 回旭川文学資料展によせて

黒田 忠

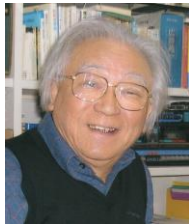


私が初めて旭川に住んだのは、平成元年から平成 8 年までですが、その当時、山の仲間に誘われて、旭川の隣にあった「山岳酒場ピオレ」というスナックに連れて行かれました。お店の雰囲気やマスターの手柄が気に入って、3・6 街での飲み会の帰りに立ち寄るのを慣例にしてみました。「ピオレ」は山の村第 2 役場と称して、山の村の住民や、山岳関係者が多く立ち寄り、店内には山岳写真なども飾ってあり、客同士が打ち解けて、山仲間のようないきいきとした飲み、語り合うことの出来たお店でした。マスターの山際さんにビニール袋に入った「豆本」を自慢げに取り出し見せて貰ったことがあります。それが三好文夫の豆本「大雪山素描」「発掘遍歴」「春画家風太郎抄」「梟の歌」の 4 冊であり、私はその豆本にすっかり魅了され、その豆本の作者について、図書館の資料室などで調べたり古本屋さんめぐりをして少しずつ収集するようになったのです。著作や豆本以外の資料については、生前、三好文夫と親交のあった方々から頂いたものです。1954 年(昭和 29 年)北海道日新聞社の 10 万円懸賞小説に 1 位入選し新聞連載の小説「ピ

ルトに纏る譚」の切り抜き、生原稿などです。私が収集した資料の殆どは旭川文学資料館が開館するときに寄贈しました。三好文夫のコーナーが設けられ展示されていることは何よりも嬉しいことでした。実は私は山部で生まれました。三好文夫は同郷の大先輩になるのですが、生前お会いすることはできませんでしたが、色々な人との繋がりの中で収集出来た資料を通じて、三好文夫の人となりについて知ることが出来ました。このたび第 18 回旭川文学資料展「三好文夫・小野寺与吉・愛山溪・山の村展」の会期中に講演をさせて頂いた機会を得ました。文学に関しては素人、門外漢とも言える私などがお話しするのは、どんなものかと躊躇しましたが、三好文夫の資料収集で体験した人とのドラマチックな出会いや三好文夫や小野寺与吉がこよなく愛した大雪山の魅力について紹介できる絶好の機会と思ってお引き受けすることにしました。これもお二人のお導きかもしれません。

## 三好文夫最後の三日

江口 建二



作家であり「大雪山・山の村」の村長でもある三好文夫が、突然世を去る事になった最後の三日間を私は偶然にも 8 ミリカメラで彼の姿を追っていた。

山の村の長老根守悦夫は、戦後旭川の第三師範に赴任し、退職したらネパールに飛びヒマラヤを

撮るのが夢であった。根守はヒマラヤに入る前検査入院をするという。一週間の予定が 10 日、20 日と延びた 8 月 17 日、突然急死の報を受け私は狼狽した。柩を送った後、山の村の友人に先生との計画のあらましを聞いてもらった。「皆行きたいよ！問題は日程と資金だ」といいながらも 2 名の同意を得、東西ネパールをフィルムに納め先生の墓前で見てもらう事が出来た。

三好文夫等村民 9 名は、後を追う様にアンナプルナ方面のツアーを成功させ、現地で世話になったシェルパ・ドルジェを「我等の大雪山」と彼がまだ見た事がないという「海」をご案内したいとの問い合せに応じ、翌 78 年 7 月 1 日、予定通り旭川空港に降り立ち、村民が待つ愛山溪ヒュッテ前の拍手に迎えられた。翌朝、沼の平に向う戸野塚俊子(旭川っ子)山口敬子(ほうずき誌)を見つけた笑顔の三好は「薬を持って行きなさい」とワインを 1 本。これが最後のやりとりになった。

3 日の晩、別な会合の為山を降りていた私に電話が入った。「遺体を引き取りに来て欲しい。無理ならば自宅に行って仏を迎える準備をして欲しい」これが冗談でないと理解するのに、少なからず時間が必要であった。

私は書齋いっぱいには拡がった原稿用紙を拾い泣きながらしわを伸ばし亡骸の到着を待った。三好文夫は、生涯を通して訴え続けてきた人間とは何かを「人間同志に候えば」に託して提起し絶筆としていった。

シェルパ・ドルジェは、人の世の無情に立ち合い目を閉じた三好に手を合せ、楽しみにしていた「海」を見る事もなく計画なかばにして旭川を後にしていった。(文中敬称略)

# 事務局だより

## 【定期総会を開催】

平成二十七年五月十七日午後一時半より、旭川市常磐館第二展示室にて平成二十七年定期総会を開催。出席者二十八名、表決委任者一〇二名。議長は山田勝子会員。議事録署名人は佐藤比左良、森内傳各理事。議題は平成二十六年度事業報告及び決算報告、会計監査報告、平成二十七年事業計画案及び予算案、理事選任。各議事異議なく承認されました。理事選任では、前任の方々にも引き続き理事をお願いすることとなりました。

## 【理事会を開催】

〔平成二十七年年度 第一回〕  
平成二十七年五月二十七日午後三時より、旭川市常磐館地階交流室にて開催。出席理事十二名、事務局出席一名。審議事項は、会長、副会長の選定。互選により前任のとおり会長に菅野浩理事、副会長に石山宗晏、佐藤比左良、十河宣洋の各理事とすることが決定されました。

## 寄贈資料紹介

### 収集・提供いただいた資料本の数々

昨年十二月中旬から今年七月初旬まで、追加された資料の一部を紹介します。

### 文学資料調査事務局

沓澤 章俊

- ・宮沢一詩集『百万年』。著者 札幌在住。詩誌「青芽」「詩人会議」同人
- ・道内、旭川発行の川柳句集
- ・「伝書鳩」十五号（井上靖記念文化財団）
- ・柳澤美晴歌集『一匙の海』。第一歌集。著者は旭川生まれ。この歌集で第十二回現代短歌新人賞、第二十六回北海道新聞短歌賞、第五十六回現代歌人協会賞をそれぞれ受賞
- ・『椋鳩十の本』（理論社）全三十六巻
- ・岩田道夫詩画集『はれのちくもり』。著者 網走市生まれ、旭川に居住。昨年七月四日急逝
- ・旭川北高文芸部誌「玉響（たまゆら）」、同生徒会誌「あゆみ」
- ・文芸同人誌「PETANU」二十二号
- ・松田光春『大正二年（北海道大洪水と大凶作の実態）』
- ・詩誌「パンと薔薇」「詩邦人」「鮫」
- ・『第二十五回北海道現代俳句大会作品集』
- ・木村照子句集『氷旗』
- ・立野茂編『村山芳子の日記』
- ・中島悦子直筆原稿「声をめぐる」「奇術をめぐる」（詩集『藁の服』収録）。中島悦子詩集『藁の服』。著者は当詩集で第四十八回小熊秀雄賞受賞
- ・本田初美詩集『どこにいますか』。著者 湧別町芭露在住
- ・『すずかけ吟社発足三十周年句集「すずかけ」』
- ・韓国詩誌「詩愛」（ハングル語）。第二十五回小熊秀雄賞受賞者 佐川亜紀氏の作品収録
- ・田中綾『書棚から歌を』
- ・詩誌「詩霊」「文藝軌道」「コールサック」
- ・俳誌「氷原帯」「椴」

- ・「旭川のふだん記」六十一、六十二号
- ・新宅一葉子句集『濃むらさき』
- ・「Quadrante（クアドランテ）（四分儀）」十七号。岸伸子「『王子主婦連』の成立と意識変革」収録
- ・井上靖読書会二十周年記念誌『旭川が生んだ文豪 井上靖』
- ・笹川良江編『大雪山国立公園 生みの親 田龍太郎の生涯』

その他、各文芸誌、各文学館報等、多数寄贈いただきました。ありがとうございました。

## 友の会人事動向

（敬称略）

### 【新入会員】（かっこ内紹介者）

富樫勇夫／ 上村房子（富樫勇夫）／  
上田郁子（荒川美智）

### 【退会者】

岡荘司 小杉静江

### 【逝去】

二〇一四年五月二十日没 桜田和夫様

### 【現在会員数】

二〇三名（七月十三日現在）

## ボランティア募集

旭川文学資料館の受付業務ボランティアを募集しています。興味のある方は事務局までご連絡ください。（TEL 22-3310）